

「二つのミンゾク学」の盛衰 ――過去と現在――

渡邊 欣雄

1 なぜいま「二つのミンゾク学」？

2012年度で第4回目を迎える国際常民文化研究機構の国際シンポジウムにおける、このメインテーマを「二つのミンゾク学」にするという腹案は、昨年度のシンポジウムの折に機構運営委員長の佐野賢治教授から内々に伺っていた。そのときは「忘れていた懐かしい響きをもった、かつての標語の復活」と思っていたが、昨年度に引き続きシンポジウム第一日目の司会進行と総括を任されて、単に「懐かしい」と思っただけでいらぬことを自覚した。司会や総括役だとはいえ、このテーマについて主体的に関わらざるをえなくなったからである。

小熊誠・神奈川大学教授と分担して、じっさいの司会進行と総括を任された第一日目のセッションは、「民族の交錯―多文化社会に生きる―」というテーマのシンポジウムだった。しかし、このセッション・テーマは、わたしから見ると「二つのミンゾク学」というテーマには合わない内容だった。わたしはいま、ある大学の学部創設に関わっているが、その学部名が「多文化社会学部」。この学部で構想された設置科目には「文化人類学」（ここでは「民族学」と同一視する）はあっても、「民俗学」はまったく設置に必要のない科目であり学問だったからであり、第一日目のシンポジウムの発表報告も、おおかた「文化人類学」の多文化主義研究を目指すものだったからでもある。民俗学に、たとえば島村恭則教授[2010]のような多文化主義を意図した研究がないわけではない。しかしこのたびのメインテーマのように、なおまだ文化人類学と対等に議論しあえるほど、多くの研究成果が民俗学にあるとは思えないのだ。

わたしが聞いていたシンポジウムの構想は、あくまでも「二つのミンゾク学」。したがって憚りながら、それについてわたしなりの主張を記した次第である。

「二つのミンゾク学」というタイトルを、懐かしく思ったのはほかでもない。「二つのミンゾク学」の意味するところは「民俗学」と「民族学」、両者の発音が同じ「ミンゾク」であることに由来しており、かつては両者の違いを区別しつつ、その類似性、共同研究の必要性を訴えるために用いられてきた表記だったからだ。

懐かしく思ったのには二つの理由がある。一つは現在、「民族学」という表記は、「国立民族学博物館」などを例外としてほとんど使われなくなっており、したがっていま教えている学生に「わたしは二つのミンゾク学を専門とする教員です」などと自己紹介しても、たぶん詳しいその解説なくしては理解ができないだろうということ。そしてもう一つは、以前ほどいまは「二つのミンゾク学」を専門としている研究者はおらず、民俗学と文化人類学（民族学）の現在の研究内容には、大きな隔たりがあるということである。言い換えるなら、両者は以前唱えられていたほど、「二つのミンゾク学」として対等・互恵的な関係にはないだろうということだ。

2 「二つのミンゾク学」の過去：文化人類学へと発展した民族学

わたしの学生時代（1965～1975）には、「二つのミンゾク学」は生き生きとした有益な表現だった。すなわち、わたしは「社会人類学」「文化人類学」を専攻したが、それを「民族学」という名に置き換えて、「民俗学」との内容の異同について語ることは当時の慣例だった。じっさいわたしも小田亮氏と共

著でそんな評論を書いたことがある [1981]。

その関係が大きく変化したのは、かつての「日本民族学会」の「日本文化人類学会」への改称問題だったと思われる。つまり当時の文系の「人類学」は、戦前からの学協会名称である「民族学」が正式な学会名称だったことにより「民族学」に同定されていたし、されねばならなかった。

しかし学会名称が「民族学」だったとはいえ、この学会の会員の多くは「民族学」を学んだことはなく、「民族学」にアイデンティティさえない会員がいた。日本が経験した「民族学」の歴史と「文化人類学」の歴史は違うと言えは違うし（とくに団塊世代以降）、同じと言えは同じ（とくに戦前に学生だった世代）であり、戦後世代が増加するにつれて「民族学」は無縁になっていったはずだ。会員の多数が自分の学んだ専攻や科目名である「文化人類学」を学会名として希望したことにより、2004 年度から「日本文化人類学会」に改称された。以後現在まで「民族学」は死語になったとはいまい。しかし文化人類学者にとって、日本ではあまりなじみのない学問名になっている。「民族学」と「文化人類学」の名称が併存している、たとえば中国や台湾では両者の内容を区別することが多い。「民族学」と「文化人類学」とは別物だと考えてもよいわけだ。それならなおのこと、日本では「民族学」は大学教育に、ほとんどない無縁の学問名称だということになる。

ここでわたしが言いたいのは、日本には多くの文化人類学者がいるが、現在、彼らは「民族学」は過去の名称だ、違った他国の学問名称だと思っている傾向があるということであり、したがって「二つのミンゾク学」は過去の標語だと認識されやすいということになる。

話は飛躍するが、海外で唱えられている「ethnology」、これを日本の「民俗学」の英訳として用いると、日本で行われている民俗研究の多くがより正確に海外で理解されるのではないかということも、「二つのミンゾク学」の関係を、より複雑にするであろう。少なくとも「folklore study」や「folkloristics」という名称よりも、〈学問名称〉として評価されるのではあるまいか？

3 「二つのミンゾク学」の現在：不要になりつつある民俗学

「二つのミンゾク学」が懐かしい表記であることは、日本文化人類学会の改称問題以降、とくに文化人類学側が原因で過去の表現になっていることは述べたとおりだ。しかしそんな名称問題よりはるかに、民俗学と文化人類学との学問内容の、この 20~30 年の乖離が、両者の距離を大きくしているように思われる。じっさいかつて唱えられていたような「二つのミンゾク学」間の異同がいまなおあって、相互に共同研究などの分担が可能なのだろうか、ということだ。

1980 年代後半から 1990 年代にかけて、文化人類学は「表象の危機」に直面していた。言い換えるなら「自分が調査研究したい現地人を描くことそのものの行為が問題視されるほどの危機」に直面していた。もっと言い換えるなら「文化人類学そのものの存在の危機」に直面していた。異文化や他者の記述なくして、この学問はないからだ。発端は E・サイードの「オリエンタリズム批判」[1978] にあり、また J・クリフォード、G・マーカスらによる「文化を書く」[1986] ことの問題視など一連の研究者の他者研究の立場に及び、かつ文化人類学者みずからが他者を描くことの内容そのものの権力性に及んでいた。

ヨーロッパのオリエント（東方）に対する研究や記述は、かれらの好奇心（神秘性・異郷風味・原始性など）に発し、当時の政治、軍事、科学などのヨーロッパの優越性・支配性にもとづく他者支配の様式だといい、その研究様式は文化人類学の内容も例外ではないとされた。「異文化理解」のためといいつつ、その研究や記述は人類学者の価値観を規準にしており、異文化の担い手たる他者を劣等視するような記述であると。当時、文化人類学が批判されたのはそればかりではなく、モダンな時代まで営々と築き上げてきた理論や姿勢のすべてだった。これを「ポストモダン」的視点の台頭だとするなら、1990

年代以降は「モダン人類学」の脱構築と「ポストモダン人類学」の創造という、文化人類学内容そのものの知識革命の時代だったということになる。以後、多くの文化人類学は研究内容を「現代」に適うよう全面的な入れ替えを行って、いまに及んでいるわけである。

その同じ時代に、つまりは 1990 年代に民俗学は何をしてきたのか？ 民俗学も例に漏れず、やはり E・サイードらの指摘を受けて、それまでの民俗学の（植民地的）権力性、記述の政治性を民俗学者以外から批判され、かつまた民俗学者みずからも自己批判してきた。すなわち村井紀 [1992]、川村湊 [1996]、あるいは岩竹美加子 [1996] などの指摘であり、とくに柳田民俗学に対する批判が多かった。そしてさらに同じ頃、「落日の中の日本民俗学」[山折 1995] とまで言われるほど、日本民俗学はもはや他分野に対する影響力がなくなっていて、新しい理論はもとより開発できず、民俗学独自の素材収集力さえもはや期待されず、研究そのものが衰退傾向にあった。まさに民俗学もまた、学問存立の危機にあったのだ。しかし両者はその後、まったく違った方向に歩んできたように思えてならない。それが「二つのミンゾク学」というほど両者が一致協力して、共通の課題に対処できるような状況にはない現状を創り出した原因だと思っている。

文化人類学は、わたしに異見はあるが [2010]、いまや研究内容は一新してしまい過去の研究との対話は不可能なほどになっており、同時に他の学問と区別すべく文化人類学を定義することがもはや困難なほど内容は他分野にまで及んでいて、多様化の一途をたどっている。他方、日本民俗学会談話会の活動その他を経験してのことだが、民俗学は研究内容にあまり新しさを見いだせないほど、依然として停滞から衰退方向へと向かっているという危機感を覚えるのである。極論するなら、民俗学はもう学問として不要なのではないかという危機感である。それに意外や意外、かつての柳田民俗学批判に対する十分な反論もせずに、かえって柳田國男著の読み返しや見直しがいま盛んなのだ。したがって日本民俗学会全体の趨勢として、ほとんど「ポストモダン」を経験していないと思われるし、かつまた学問そのものの *involution*（退縮）が進行しているのではないだろうか？ わたしは日本文化人類学会での役員経験よりはるかに多く、この間、日本民俗学会の理事を務めてきた。その役員経験からしても、そう断言できるほどである。

したがっていま、「二つのミンゾク学」という表現は研究内容や、学問姿勢の著しい違いからしてもありえないだろうと思う。民俗学は現在の文化人類学から学ぶべき事はたくさんあるが、文化人類学が民俗学についていま学ぶべきことはほとんどないだろう。この 20 年間、文化人類学がみずから研究内容を変えてまで、学んできたことや反省したことはあまりにも大きい。民俗学者は隣接の学問として真摯にいま、文化人類学のこれまでの試行錯誤の経験を学ぶべきときなのだが、無念ではあるが、学ぶ意欲そのものがすでにないのではないかと思われる。

参考文献

-
- 岩竹美加子編訳 1996『民俗学の政治性—アメリカ民俗学 100 年目の省察から—』、未来社
 川村 湊 1996『「大東亜民俗学」の虚実』、講談社
 Clifford, J. & G. E. Marcus eds. 1986 *Writing Culture : the Poetics and Politics of Ethnography*. Univ. of California Press.
 Said, E.W. 1978 *Orientalism*. Pantheon Books
 島村恭則 2010『〈生きる方法〉の民俗誌—朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究—』、関西学院大学出版会
 村井 紀 1992『南島イデオロギーの発生—柳田國男と植民地主義—』、福武書店
 山折哲雄 1995「落日の中の日本民俗学」『フォークロア』7号、本阿弥書店、12～17頁
 渡邊欣雄 2010「持続可能な理論構築のために—一六〇年代学部生からの現代人類学批判—」、『社会人類学年報』36巻、弘文堂、103～122頁
 渡邊欣雄・小田亮 1981「民俗学と民族学」、『地理月報』283号、二宮書店、20～23頁